

聖書：ヤコブ 4：1～5

説教題：ねたむほどに慕って

日時：2017年10月29日（朝拝）

ヤコブがこの手紙を宛てたクリスチャンたちの間には戦いや争いがあったことが1節から分かります。このことはすでに読んだ3章からも想像できました。3章では舌の問題が語られました。このことは読者たちの間に舌を制御しない問題があったことを暗示しています。また前回見た3章13～18節においても、苦いねたみと敵対心によって互いに誇っていたことが暗示されていました。最後の18節でも「平和」「平和」と繰り返して語られ、「平和」を強調せざるを得ないほどの現実がそこにあったことが伺われます。そうしてこの4章で「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。」と語られています。2節を見ると「あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。」とか「うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。」とあります。この手紙の読者たちは、互いに互いの持っている地位・評価・名声を羨ましく思い、争っていたようです。あの人ではなく私こそ人々の間で認められ、賞賛され、高い地位に置かれるべき器である。そのように自負しつつも、思い通りにならないと、陰でも表でも人を批判し、あの人には間違っている！と指摘し、こき下ろそうとする。

ヤコブは「何が原因なのか」「それはどこから来るのか」と問います。彼らとしては、自分たちは真理に熱心なのだとして自負していたでしょう。神の義が地で行われるために、神への愛によって、神への熱心によって、私は活動しているのだと。しかしヤコブは、そうでないと言います。彼は1節で「あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか」と言います。問題は外側にあるのではない。問題はあなたがたの中にある。あなたがたの中にある欲望こそ問題である。それが正しく治められていないため、外側に現れ出て来て、様々な戦いや争いを引き起こしているのではないかと。

私たちの欲望は、そのままにしておけば、とどまることを知りません。今持っている以上にもっと欲しいと願う。特に他の人が自分より多く持っている、それ以上に持ちたい！と駆り立てられる。そのことが2節に書かれています。「あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。」と。自分より多く持っている人を見て、自分もそうなりたいと願っても、そうならないと、相手の人をねたんで、そ

の人からそれを奪い取ろうとする。また「うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです」とあります。他の人の地位や権力、人々からの賞賛を羨ましく思って、自分でも努力しますが、それが手に入らないと、その人に戦いを挑み、その人の評判を下げて、自分がその上に行くように画策する。実にこういう問題が読者たちの間にはあったようです。迫害によって自分たちの生活が楽ではなかったという状況があったのですが、そんな試練の中で、より高い地位、より高い収入、より高い生活レベルを求めて争い合っていた。

果たしてこの問題を解決するカギは何でしょうか。ヤコブは続けて言います。「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。」すなわち神に祈っていないから。私たち信仰者は、神に願い、神から受けて満ち足りるという生き方があるのに、そこに歩いていないため、人間同士で比較し、ねたんだりねたまれたり、奪ったり奪われたりしている。せっかく与えられている信仰者の特権に生きていない。

私たちはここから、私たちの満たしは神から受けるものであることを教えられます。マタイの福音書7章7節：「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」ヤコブ1章5節：「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。」この祈りの生活こそ、互いにうらやんだり、争ったりすることから解放されるためのカギとなることです。この祈りの生活をしないでいると、私たちはお互いを比較して醜い争いを始めてしまいます。そこにある平和を壊す動きを始めてしまいます。そしてついには人殺しにまで発展しかねない。私たちは日々祈っていないために、まさにこのように行動しているということはないでしょうか。祈りを通して神から満たしを頂くべきなのに、それを受けていないために、不満が心の中に一杯となり、フラストレーションがたまり、それが怒りとなり、誰かへの敵意となり、争いとなって、多大な迷惑を周りに及ぼしている。「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないから」とヤコブは言いました。神にこそ求め、祈るといふこの基本を大事にしなければと思わされます。そこから御心に沿った歩みと、平和をつくり出す歩みを導かれて行きたいのです。

しかしある人は言うかも知れません。私は祈っていないわけではない。私は祈って来た。これまで何度もそうした。しかし願った通りにならなかったと。私たちもそのよう

な経験をします。祈りは信仰生活の基本です。祈りなさいと聖書で勧められ、そのよう
に取り組んでは来た。しかし理想と現実とは違う。祈ってもあまり聞かれない。その内、
祈りはあまり効果がない方法ではないかと思えて来る。祈りは実際的ではないのではな
いかと思えて来る。しかしそんな私たちへのヤコブの言葉は厳しいものです。彼は3節
でズバツと言います。それはあなたがたが自分の快樂のために願うからであると。悪い
動機で願うからであると。ですから私たちが問うべきは、祈りは効果的か否かではあり
ません。むしろ問うべきは、私の祈りは正しいのかということです。もし正しい祈りを
していないなら、すなわち悪い動機で祈っているなら、神がそれを聞くはずがありません。
そうしたら神は私たちが罪を犯すのをさらに助けることになってしまいます。先に
マタイの福音書7章7節の「求めなさい。そうすれば与えられます。云々」という御言
葉を参照しましたが、イエス様はその前の6章で祈りの基本を教えてくださいました。
すなわち「主の祈り」と呼ばれる祈りです。そこで教えられたことは、神の栄光を求め
る祈りがまず先に来なければならないということです。御名があがめられるように、御
国が来るように、御心が行われるように。この神の栄光を第一に祈る祈りの下で、私た
ちに関する祈りが祈られるべきということでした。この手紙の読者たちは、自分たちが
より知恵のある者となること、賢い者となること、優れた賜物と地位を持つ者となるこ
とを求めました。これが神の栄光を第一に求める中で、御心にかなうことなら、と祈る
なら正しい祈りです。しかしそうではなく、これによってあの人に打ち勝ちたいとか、
人々から賞賛されたいとか、高い地位にあげられて良い生活をしたいたいといった自分の快
樂、自分の栄光、自分の満足を求める祈りなら、それが聞かれないのは当然です。私た
ちは自分自身の祈りを、この基本に立ち返って、今一度検討してみなければならないの
ではないでしょうか。

ヤコブは続けます。4節：「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであ
ることがわからないのですか。」 「貞操のない人たち」とは、原文を直訳すれば「姦
淫の女たちよ」になります。この言葉はユダヤ人にはピンと来るものです。旧約時代か
ら神とイスラエルの関係は結婚関係にたとえられて来ました。イザヤ書54章5節：「あ
なたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主」つまりここでの姦淫とは靈的姦淫
を指します。神との結婚関係にありながら、心が神から離れ、むしろ世を愛している。
神よりも世に心を奪われ、世に多くの関心を注ぎ、世と同じような歩みをしている。彼
らは姦淫と呼ばれるほどのことを自分たちはしているとは思っていなかったかもしれ
ません。神に対してそこまでの態度を取っているつもりはないかと思っていたかもしれま

せん。しかしその生活は、神よりも世を愛していると言わざるを得ませんでした。2章1～13節で見たように、彼らは富んでいる人と貧しい人を差別し、えこひいきをして歩んでいました。また3章1～12節で見たように、舌を制御せず、他の人をきびしく批判し、呪う言葉を口にしていました。また3章13～18節で見たように、苦いねたみと敵対心によって自分を持ち上げ、高ぶっていました。そして4章1～3節で見たように、欲望に突き動かされて争ったり、戦ったりしていました。これは神との結婚関係を感謝し、そこに誠実に歩んでいるとは言い難い姿です。それはむしろ世に心ひかれ、世の友となっている姿です。そのように神から心が離れ、世と同じようになって歩んでいるのに、都合の良い時だけ神に「これをしてください」「あれをしてください」と祈ってもダメである。私たちは果たして神との関係を感謝し、神と結婚関係にある者のように歩んでいるのでしょうか。それとも世を愛して、世を友として歩んでいるのでしょうか。世を愛している状態で、自分の快樂のために何かを願っても、それが受けられないのは当然だとヤコブは語っています。

最後の5節でヤコブはこのように述べます。「それとも、『神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる』という聖書のことばが、無意味だと思うのですか。」 ヤコブがここで私たちに思い起こさせているのは「神のねたみ」です。このねたみという言葉は、人間の間ではあまり良い意味では使われません。3章14節でも「苦いねたみ」と言われていました。しかしこの言葉は神に対して使われることもあります。たとえば十戒の中で出エジプト記20章5節には、「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」とあります。より重要なのは出エジプト記の34章14節です。そこに「あなたはほかの神を拜んではならないからである。その名がねたみである主は、ねたむ神であるから。」とあります。「名は体を表す」と言いますが、ここに神ご自身の名が「その名がねたみである主」と言われています。つまり神ご自身の本質に関わる正しいねたみがあるということです。そのねたみとは、愛の関係を熱心に保とうとするとところから来るねたみです。あるいは愛の関係を破壊する者に報復しようとする熱心から来るねたみです。前の節で触れられた結婚関係のことを考えると分かりやすいと思います。もしある家庭に愛人が入り込んだり、伴侶の気持ちを自分から引き離すような人が入って来たら、私たちはどうでしょう。ねたみを感じずにいられるでしょうか。もし少しもそれを感じないなら、それは本当の愛とは言えないでしょう。もし配偶者が他の異性と姦淫の罪を犯したこと

を知った時、激しい精神的ショックやねたみの感情を少しも抱かないとしたら、その夫婦の愛は健全なものと言えるでしょうか。そうは言えないでしょう。

実に驚くべきは、神は私たちに対してこのような感情を抱くほどに私たちを求めてくださっているということです。5節で新改訳は括弧の中を、「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」と訳していますが、「御霊」と訳されている言葉は、ただの「霊」とも訳せる言葉です。そしてここは御霊ではなく、私たち人間の霊ととらえた方が良いと思います。もしこれが聖霊を意味するなら、ヤコブ書ではここだけが聖霊について述べている箇所となります。またこれと同じ言葉はこの手紙では他にもう1回、2章26節にだけ出て来ますが、そこでは人間の霊を指して「たましい」と訳されていました。ですからここでもそのように取る方が自然ですし、文脈に良く合います。創世記2章にありますように、神は人間にいのちの息を吹き込むことによっていのちある者として下さいました。そのような私たちのたましいを、その存在そのものを神は心から愛し、求めて下さっているのです。ねたむほどに慕ってくださるので、一体私たちは神の御前に何という者たちとされていることでしょうか！

それゆえ、もし私たちがこの神のねたみの愛に答えられないなら、大変なことを意味します。この神から心が離れ、世という愛人を求めているなら、大変なさばきを自分自身の身に招くこととなります。神は私たちが神以外のものに心奪われて生活しても、「いいよ、いいよ、かまわないよ」と言われる方ではありません。神を忘れて自分勝手な生活をして、「わたしはそれでも共にいるよ、それでも赦すよ」と言われる方ではない。むしろ神は私たちが神を第一にしない時に、激しいねたみを覚えられる。それはそれほどご自身が私たちを愛し、まさに夫としての務めに献身して下さいているからです。それゆえ私たちが霊的姦淫の生活を続けるなら、やがてどんなに厳しい報いを受けることになるか推し量るべきです。このことを思って急いで悔い改めの生活へ向かわなければなりません。

果たして私たちは、神がこのようなねたみの感情を抱くほどに、私たちを御心に留めてくださり、その一挙手一投足を深い愛と関心をもって見つめてくださっていることを知っているでしょうか。ヤコブは、「神がねたむほどに私たちを慕い、愛していると語っている旧約聖書の言葉は、無意味に語られていると思うのですか」と問うています。聞いたと思ったら、すぐ反対の耳から抜けて行って良い言葉として語られていると思う

のですかと言っています。「神は私たちのたましいを、その全存在を、ねたむほどに慕っておられる。」この言葉を心に留めて、私たちの応答を考えて行きたいと思います。この神の愛の呼び掛けに感謝して、この神にこそ心を向け、神に祈り、神との交わりから喜びと満足を頂き、怒りや争いではなく平和をつくる者の歩みへ、そして結婚生活にもたとえられる神との豊かな交わりの内に導かれる信仰の歩みの幸いへ進みたいと思います。